〔「大隈祭」における講演活動〕

大隈重信が追い求めたもの

島　善高

一、実　学

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました島善高と申します。私は佐賀市金立町の出身でございまして、こういう場所でお話しさせていただくことを非常に光栄に感じると同時に、また非常に緊張もいたしております。

先ほどの中学生のスピーチ、いずれも大隈さんを的確にとらえておりまして、私がこれから話そうと思うことも大体話されてしまいました。また本日は、国会議員の先生方はじめ、小学生までいらっしゃるということで、どこに焦点を絞って話したらいいんだろうかと悩んでおりますけれども、私なりの大隈重信観をお話させていただきたいと思います。

本日ご列席の皆様は、大隈さんがどういう人生を送ったのか、どういう業績を残したのかについて、大体の事はご

承知のとおりでありますけれども、一体何を目標にして政治活動をやり、何のために教育をやっていたのかということについては、十分お考えにはなっていないと思いますので、深く掘り下げて御紹介したいと存じます。

言うまでもなく大隈さんの業績の第一は早稲田大学を作ったことでありますが、その早稲田大学には、早稲田大学校歌というのがありまして、学生、卒業生、教職員は皆、そらんじております。本日は、「早稲田じゃない、慶応出身だ」とかいう方もいらっしゃるので非常に恐縮なんですが、ちょっとレジュメをご覧ください。一番目は「都の西北」で始まり、二番目が「東西古今の文化のうしほ」、三番目は「あれ見よかしこの常盤の森は」で始まります。皆が知っている、皆が覚えてるこの歌、いったい何をテーマにしているのかと言いますと、一番目は「久遠の理想」、二番目も「久遠の理想」、そして三番目にも「理想の光」とあります。早稲田大学校歌のメーンテーマは「理想」なのであります。

それでは早稲田大学校歌で歌っている「理想」とは、いったいどのような内容なのかということですが、早稲田大学のホームページを開いてみましても、早稲田大学の百年史を開いてみましても、残念ながらこの「理想」については一言も触れてありません。そこで本日は、早稲田大学の校歌に書かれている「理想」、そして大隈さんが追い求めた「理想」というのは一体どういうものであるのかということを、私の理解する範囲内でお話ししようと思います。

先ほど、中学生たちが紹介してくれましたように、大隈さんは、佐賀で生まれて藩校弘道館で勉強いたしました。その大隈さんが中学生ぐらいの年齢のとき、十五六歳のときに、ペリーが来航いたしました。藩校弘道館では儒学、特に朱子学を皆勉強していたのですが、しかし、朱子学をいくら学んでも、アメリカという単語は出てまいりませんし、ペリーが乗ってきた軍艦の造り方なんか、どこにも書いてない。今まで一生懸命に朱子学を勉強してきたのですが、ペリー来航という現実に直面して、どう対応するかという段になって、朱子学のみでは解決できない問題がある

ことに気付いたわけであります。大隈さんだけではありません。当時、志のある若い青年たちは、皆、「今までどおりの学問でいいのだろうか?」と悩みました。

大隈さんは、藩校の先生たちに抗議をして、結局は退学処分になるわけであります。もちろん、従来の朱子学の眼目「修身治国平天下」(自分の身を修め、家庭を治め、自分の郷里を治め、そして天下を平定する)それ自体はそれとして意味があるのですが、しかし、それだけでは足りないじゃないかということを感じて、大隈さんは学校騒動を起こして退学処分になりました。

そのときに大隈さんが出会ったのが、藩校の先生であった枝吉神陽です。枝吉神陽も早くから朱子学中心の学問に批判を唱えていました。朱子学ももちろんいいところはあるけれども、それ以外に、日本の歴史とか、日本の法律とか、貿易とかを勉強しなければならないと言っていました。神陽は、奈良平安時代には、日本でも大きな船を作って海外に行っていたではないか、ところが、江戸時代になって鎖国をして、貿易は長崎に限るというようにしただけである、「それじゃ、よくない。学問は、実際の役に立たないといけないのだ」と、こういうことを主張しております。実学であります。大隈さんは、この神陽先生の教えを受けて、国学とか、律令とか、あるいは実際に役に立つ学問に目を向けていくわけであります。

当時、日本では、オランダ語だけを公式の外国語として許可しておりましたけれども、「オランダ語は世界に通じない、世界に通じるのは英語である」ということで、大隈さんは佐賀藩に提案して、長崎に致遠館(最初は蕃学稽古所)を作らせました。長崎駅から歩いて十分くらいのところですが、現在は碑文が建っております。

大隈さんは致遠館で、アメリカ人の宣教師フルベッキから英語を一生懸命教わるわけであります。聖書を学んだり、アメリカ独立宣言を学んだりしましたけれども、後の大隈さんにとって重要なのは、そこで、西洋の立憲思想、そし

て議会制民主主義を学んだことです。「政治というのは、選挙で選ばれた人たちが集まって議論をして結論を出していく、そういうスタイルにしないといけないんだ」ということ、これは大隈さんが終生持ち続けた理想の一つであります。こののち、江戸幕府が倒れて明治政府ができますと、大隈さんは明治政府の官僚となっていくわけでありますが、そのいきさつは、本日は省略いたします。

二、真の利

幕末に佐賀・長崎で成長した大隈さんに、さらに、もう少し素晴らしいヒントを与えたのが、小野梓という人であります。小野梓は、四国の一番西側に宿毛という、現在、人口三万人ぐらいでしょうか、小さな市がありますけれども、そこの出身者でありまして、明治の初めにアメリカからイギリスへ渡って、いろいろ勉強して帰国します。当時、イギリスでは、ベンタムという人の功利主義思想が流行しておりました。ご存知だと思いますが、「政治の目的は、できるだけたくさんの人に、できるだけ多くの幸福をもたらすことである」というものです。「最大多数の最大幸福」という、有名なものですね。何代か前の総理大臣も、「最少不幸社会を作るのだ」とおっしゃいました。あるいはつい一週間ほど前にも、ある県知事さんが、「政治の目的は、幸せの量を最大にするものだ」ということをおっしゃっておられましたけれども、それらも、功利主義に属する考えと見てもよろしいでしょう。

小野はこの功利主義を日本に伝えた人として知られていますが、しかし、小野梓が偉いのは、ベンタムの功利主義はまだ不徹底である、まだ足りないと指摘しているところにあります。なぜかというと、「最大多数の最大幸福」というときには、まだ救済されない人が残っていることが大前提となっているからです。「最大多数」というのは、す

べてではありません。不幸な人の存在が前提になっております。現実政治では、確かに全部の人を救済することは不可能でしょう。しかしながら、政治理論といいましょうか、理想という点から見ると、それは、やはり不徹底であります。

小野梓は、『利学入門』という文書を書いております。その中で、政治活動の目的、経済活動の目的、あるいは人生の目的を、どこに置けばいいのかということで、「他に及ぼし済世度衆して衆と其楽を共にするは快楽の至大なる者」と述べています。他の人を救済する、悩んでいる人を救う、困っている人を助けて、そういう人たちと一緒に楽しむ。それが、快楽の極致である、と言っています。

逆に言えば、「救済できない人が一人でも残っていたら、苦しんでいる人を救うことができなかったら、それが一番の苦痛である」ということであります。これは、恐らく仏教とか儒教から導かれるものだと思いますけども、理論的には、ベンタムの功利主義「最大多数の最大幸福」を超えているのであります。小野は「全員を救済しないといけないんだ」と、高い理想を掲げておりました。小野は、全員を救済するのが「真の利」であると言っています。

もちろん、人間には、経済力の差、能力の差がありまして、境涯の差というものもあります。全員が同じようなことはできませんが、例えば、困っている人のそばに行って一緒に泣いてやるということではできます。「ああ、痛かったね」と言ってやることはできます。少なくとも、そういう気持ちを持って政治をする、教育をする、経済活動をする、家庭生活を営む。そういうことが、「真の利」につながるということを小野梓は考えました。小野は帰国後に共存同衆という会を組織しておりまして、その会員たちの智慧を借りて、こういった考えをまとめ上げたのであります。

そして、明治十四年頃に実際に政党を作ろうということになり、立憲改進党という政党になっていくわけであります。「留客斎日記」と題する小野の日記の、明治十四年九月二十五日の条に「吾が党の樹立の目的を議す。討論数次、

終に真利の趣旨を取りて吾が党の操る所の主義となす」（原漢文）と書かれています。明治十四年政変よりも前のことであります。「真利」の趣旨というのは、先ほど言ったように、「困っている人全員を救済する」ということであります。

小野は立憲改進党を作る直前の明治十四年十二月に「何以結党」という文章を書いていますが、そこに、「幸福は人類の以て得んことを期する所也。然れども少数専有の幸福は我党これを排す。蓋し是の如きの幸福は所謂る利己的のものにして、我党の所謀なる大日本全般の幸福に反すればなり。大日本全般の幸福は我党の以て謀るを期する所也」とあります。ここで、「大日本全般」と言っています。「最大多数」じゃないのです。「大日本全般の幸福を謀るんだ」、これが立憲改進党の目的でありました。

小野梓のこのような強い考え、これに大隈さんも同意いたしました。少々前後しますが、小野の日記の明治十四年三月二十日条には「午後、大隈参議を訪う、対座して今政十宜に就きて大いに時事を論ず。参議、胸襟を啓き、詳に時勢の所在を示す。（中略）余も亦、切に施治の方嚮を定めざるの非を痛論す。参議、大いに之を可とす。懇話数時間」（原漢文）とあります。

大隈さんは忙しい人だったので、政治をやったり、教育をやったり、全部を一人で行なうことはできないものですから、ブレーンとして小野梓を活用していました。小野の考えは大隈さんの考え、大隈さんの考えはまた小野の考えでもありました。このようにして、大隈さんは小野梓の力を借りて、明治十四年の政変で政府を去ったあと、立憲改進党を作り、東京専門学校を作っていくわけであります。

三、犠牲的精神

小野梓は非常に優秀で、しかも利他心に富んだ人でありました。東京専門学校を作っても、最初八十人ぐらいしか生徒は集まりませんから、その程度の学生数ではだめなわけでありますから、もっと多くの、日本全体の青少年にいろいろな新知識を授けるには、書物を出版するしかないということで、本屋さんを経営いたします。現在の冨山房の前身、東洋館書店です。

他方小野は、立憲改進党の運営にも携わっていますので、大忙しなんですね。それで遂に、忙しくて体を壊して、わずか三十三歳で亡くなってしまいます。大隈さんは小野梓を非常に頼りにしていましたから、がっかりするんですね。

大隈さんは「殉教者としての小野梓君」という文章を残して、小野を追悼しています。「小野君はあのか弱い身体を持ちながら、死ぬる迄積極的に働いた」と。小野は、本当によく働きました。小野には漢文の日記が残されていますけれども、それには吐血したことが書かれています。小野は結核でしたので、血を吐くんですね。普通の人だと、血を吐いたら一週間ぐらい休養するわけですが、小野は、血を吐いても、休む間もなく、東洋館書店に行って仕事をするとか、早稲田に来て仕事をするとか、立憲改進党の事務所に行って仕事をするとかするんですね。そういうことで、若死にするわけであります。大隈さんは、「(小野は)早稲田大学で帝国を維持するといふ考えであつて、一生の事業として学校の経営に従事した」、「この意味で小野君の死は、帝国の為に身を犠牲にした殉教者である。小野君は己が生命を棄てゝも国を救おうとした、その精神が学校に入つた」と語っています。つまり、東京専門学校、そして

後の早稲田大学には、小野梓の「全員を救済する」という強い熱意が入ったというわけであります。

小野梓が三十三歳で亡くなりますと、その教えを受け継いだのは、高田早苗という人であります。この人は、東大の学生の頃から小野梓のもとで勉強した人であります。後に文部大臣にもなり、早稲田大学の総長にもなる人でありますが、この人も、小野梓の熱烈な確信を受け継いでいきます。

高田早苗も立派な人で、小野の意志をよく受け継いで、学校経営に全力投球します。高田が『読売新聞』明治二十年七月十五日号に載せた「学者の心得方」という文章には、「今の学者ハ鄙事に多能なるべし」と書いています。「鄙事に多能」というのは、些細なことでも何でも出来るようにならないといけないということです。東京の大学へ行って勉強して偉そうにしていても、大工仕事も出来ない、米も作れない。たとえ中卒、高卒であっても、家を建て、米を作ることが出来れば、単なる大卒よりも立派であります。大卒、大卒と偉そうにしていても、何の役に立つのか、ということであります。「何事にも手を出すが宜し」です。

それでは、何のために勉強をし、なぜ鄙事に多能でなければならないのかというと、それは「庶民済度」のためであります。

本日は中学生や高校生も来ておられますが、皆さん、高校を選んだり大学を選んだりするときには、普通は、偏差値とか、「親が、ここへ行けと言うから」とか、世間体とか、そういうことを大体考えますよね。あるいは、会社を選ぶときも、「ここは給料が高いから」とか、「福利厚生施設がいいから」とかで会社を選ぶわけでありますけども、もちろん、それはそれで大いに結構でありますが、頭の片隅に、「社会の役に立つ仕事、人の役に立つ仕事は何だろうか」と、そういうことをちょっとでも入れておくと、進路に悩んだときに、あるいは、会社の選択に悩んだときに、

多少は役に立つかもしれないですね。庶民済度ということであります。それを大目的としていかないといけない、ということであります。

さて、先ほど小野梓の考えを紹介しましたけれども、人を救うというときには、自分のことばっかり考えていてはいけないわけですね。他人を救うためには、あるときには自分を犠牲にしないといけない。例えば、今日、ここで、こういう会が開かれるときに、前もって宣伝をする人が必要です。また当日椅子を並べたり、テントを張ったりする人も必要なわけであります。あるいは、雨が降ったらどうしようかとか考える必要もあります。受付係に専念する人も必要です。

自分は前面に出ないけれども、黒子となって、会の運営のために尽くす人が必要なわけです。他に仕事を抱えて忙しくしていても、会を運営するために、全体のために自分をある程度犠牲にしなきゃいけないことがあります。

小野梓が創立に奔走した東京専門学校はわずか八十人ほどの入学者ですから、これでは、学校の収入は大したことはなく、教員の給与すら満足に支払うことはできません。それでも教員たちは、学校経営に邁進しました。東京専門学校を創設して、一刻も早く青少年に健全な知識を授けねばならないという、使命感をもっていたからであります。人のためになるとはそういうことでありまして、仏教ではこれを利他行といいます。小野梓はそういう考えを持っており、高田早苗も、またそれを受け継いでおりました。

もちろん大隈さんも、そういう考えの熱烈な持ち主でした。大隈さんは明治四十三年三月に『国民読本』という書物を出版します。大隈さんは東京専門学校そして早稲田大学を作りましたが、まだ、日本全国の青少年の教養のレベルが低いから、政治がどんなものかをよく知らないから、分かりやすい形で基礎的な知識を提供しようと考えました。今で言えば岩波文庫ぐらいの大きさで、日本国民としての最低限の心構えを書いたものを印刷して配ります。これは

ベストセラーになりました。大隈さんはこの書物の最後のところに、「我等は至誠なるべし。我等は正義にして、仁愛なるべし。我等は剛健なる意志に兼ぬるに、犠牲の精神を以てすべし」と書いています。

人間が生きていくときには、いろいろ道徳というのが要求されるわけでありますが、その道徳の根本、一番素晴らしい道徳というのは何かというと、それが犠牲的精神であるというのです。大隈さんは、小野梓の考え、高田早苗の考えをも吸収しつつ、だんだんと大隈さんなりの理想というものを固めていくということになりました。

四、自利と利他

ところで、東京専門学校が早稲田大学と名を変えても、別段に校是のようなものはなかったんですね。そこで、高田早苗が提唱して、創立三十周年のころ、早稲田大学の教育方針を掲げようということになりました。それが「早稲田大学教旨」であります。

この教旨は、「学問の独立」、「学問の活用」、「模範国民の造就」の三つからなっています。このうち最も重要なものが三番目の「模範国民の造就」です。早稲田大学では何のために教育をするのかというと、それは模範国民を作るためだというのです。大正二年に発表されました。

早稲田大学は模範国民の造就を本旨と為すを以て、立憲帝国の忠良なる臣民として個性を尊重し、身家を発達し、国家社会を利済し、併せて広く世界に活動す可き人格を養成せん事を期す

有名な文章ですけれども、今となっては少々むつかしい文章ですね。まずは「個性を尊重」する、これは当たり前ですね。つぎに「身家を発達」させる。先ほど、「修身、斉家、治国、平天下」といいましたが、それと同じであり

ます。いくら偉そうに世界平和と言っても、家へ帰って兄弟げんかや夫婦げんかをしていたら、何にもならないわけですね。

そして「国家社会を利済し」とあります。この「利済」という単語が、なかなか理解できない。『広辞苑』を引いても出てきません。『日本国語大辞典』という大きなものを引けば出てまいります。これは仏教用語でありまして、利済の「利」というのは、利他行の利であります。「済」は、衆生済度の済であります。利他の精神を持って、衆生、まあ、庶民を救済する、そういうのが「利済」であります。この「利済」の気持ちを持ったうえで、「世界に活動」するということになります。中学生や高校生にはちょっと難しいかもしれませんけども、これが早稲田大学の憲法とも言うべきものであります。

高田早苗は、この教旨ができた頃、大正二年七月、卒業生を前にして次のように挨拶をしました。

此学校では、平生専門学術の教授と模範国民の養成と此の二の目的を達したいと云のが趣旨に成て居ります。（中略）諸君は段々世の中の仕事に就かれるのであるが、其仕事に就かれるに付ても、自分の事ばかり考えて居るやうでは身を立てることは望まれない。

自分の事ばかり考る利己主義の人間を世間は相手にする者ではない。どうしても諸君は人を利すると云ことは其結果は自から利すると云ことになる、之をよく知らなければならぬ。自分の身を立てると云ふことは、其結果は世の中の益になる。世の中の為に計ると云ことは其結果は自分の利益になる。他利即自利、自利即他利、此持ちつ持れつの関係と云者を能く考へて行かなければならぬ。

無論社会の為め国の為に諸君は尽くさなければならぬ。国の為め社会の為に尽して居れば、自ら諸君の利益は其中にある。又会社なり銀行なりへ這入てもさうである。工場へ這入てもさうである。自分の事ばかりを考へ、

其会社の利益、其銀行の利益、其工場の利益を諸君が考へられなければ、さう云ふ人間を尊重して、其会社なり銀行なりが頼んで置かう筈はないのである。諸君が一旦何れにでも身を任せたならば、自分の事は打忘れてそこの為に尽す、どうしても利他の精神と云ふ者を十分に有つて、世の中に活動して貰ひたい。さうすれば自ら諸君は立派に身が立て行くだらうと思ふ。

高田の言っていることと小野の言っていることが同じであることは、おわかりになると思います。利他の精神を持たなければならないことを強調しております。

大隈さんもまた、『早稲田清話』という書物の中で、自利と利他との関係について次のように述べています。

太陽系の中心は言ふ迄もなく太陽だが、此中心を取り捲いて金星、水星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星といふ様な諸惑星が取り捲いて居るのだが、それには離心力の働くと共に求心力が働く。（中略）月は地球を中心として軌道を画き、地球は此月を衛星として又太陽の周りに軌道を画く。是によつて諸天体の秩序が整然として一糸乱れずに往くんである。利己と利他と関係も又其通りである。利己が離心力ならば利他は求心力である。是が旨く調和して往く所が、仏者の所謂利己利他覚行円満といふものだ。此覚行円満の根本を称して、プラトーンは理智といふが、我輩は寧ろ之を良心と呼ばんと欲する。良心の命ずる所に従つて日常一切の事物に応酬して行く。是が我輩の処世観だ。

大隈さんは、己を利し、相手を利し、お互いが悟り合って、円満な社会を作る、これが自分の処世観であると言っています。

五、東西文明の調和

大正二年十月、大隈さんは早稲田の創立三十周年式典の際に、先ほど言及した早稲田大学教旨を宣言しました。少々長い文章ですが、大隈さんが何を目的として政治活動を行ない、また教育活動を行なっていたかがよく分かる文章でございますので、ご紹介いたします。

大隈さんは先ず、「世界の文明は停滞するものではない。世界の文明は日に進歩しつゝある。総て世界の思想感情、総て社会の状態は日に月に変化しつゝある時に当つて、国を立て社会を為し、又この国と社会との為に大学教育を施さんとするには、其根本として雄大なる理想がなくてはならぬ」と言っています。

大隈さんは、明治の末年から「東西文明の調和」を唱えるようになりました。東洋文明と西洋文明はそれぞれ長年月の間、別々に発達してきましたが、幕末のペリー来航以降、東西の両文明が日本の地で合流するようになりました。

ところが、洋の東西で別々に発達した文明でありますから、これを調和統一できるのかと危ぶむ声もありましたが、大隈さんは、世界平和のためには、是非とも東西文明を調和させないといけないと主張したわけです。大隈さんは、「今、日本は将に東西文明の接触点に立つて居る。吾人の大なる理想は文明の調和者として、東洋の文明と西洋高度の文明と平行せしめ、調和せしむるにある」と言っています。

そしてこの理想を実現するために、「何としても、学問の独立、学問の活用を主とし、独創の研鑽に力め、其結果を実際に応用」しなければならないと言い、先ほど触れました早稲田大学の教旨「個性を尊重し、身家を発達し、国家社会を利済し、併せて広く世界に活動す可き人格を養成せんことを期す」を宣言いたしました。

皆さんは、世界平和とか東西文明の調和とか聞いたら、「ああ、なるほど、なるほど」と、大体、すぐ理解でき、そして、「そんなの大して珍しくないじゃないか」と感じられるかもしれませんが、大隈さんは、さらに丁寧にこれを説明して、「模範国民とならんとすれば、知識のみではいかぬ。道徳的人格を備へなければならぬ。而して一身一家、一国の為のみならず、進んで世界に貢献する抱負がなければならぬ。之を支那古代の語を以て説明すれば、修身、斉家、治国、平天下である」と言っています。先ほど何度か話しましたね。自分の身も修めることができないで、「世界平和だ」と言ってどこか海外へ出かけて行っても、野たれ死にするのが落ちであります。まずは、自分の身をしっかり修めないといけない。また、家もしっかり整えなきゃいけない。あるいは地域、あるいは自分が所属するサークルとか稲門会とか、そういうところも大事にしなきゃいけない。そして、それが次第に広がっていって、世界平和につながるということでありまして、いたずらに世界平和を唱えればいいというものではないのですね。

大隈さんの言葉を続けましょう。「治国平天下、世界の平和を計らんとすれば、先づ国を治めなければならぬ。立国の意味は、現在の思想から云へば二ツに別れる。一ツは国、一ツは社会。社会が堅実に発達しなければ国も治まらない。而して其根本は家である。一国の本は一家である。家庭は則国を成す根本である。道義の根本も亦此家庭に発する。善良の風俗も此家庭から生ずる」。大隈さんは、家庭が最も大切だと言っています。私も大学で偉そうなことしゃべっていますが、家へ帰ると、家内から命じられて茶わんを洗ったり、洗濯物を取り込んだり、畳んだりしております。最初は嫌々ながらだったのですが、最近は随分慣れてまいりまして、自然体でやれるようになりました。世界平和を念じつつ茶わんを洗う、世界平和を念じつつ洗濯物を畳む、自分の身近なところからコツコツとやっていかないといけない。大隈さんは、そういうことを言っていると思います。

「唯だ専門知識を吸収するのみに汲々として、此点を閑却するに於ては、人間は利己的となる」。大体お分かりにな

られますね。本日ここにおられる年配の方、会社を経営したり、自分の部下を持ったりしておられる方は、「ああ、あの人間利己的だな」と瞬間的に分かりますよね。

利己的になれば、「進んで国と世界の為に尽すといふ犠牲的精神」がだんだんと衰えてくる、恐るべきことだ、これが文明の弊害だというわけです。そうならないよう、その弊害を避けるようにするのが模範国民の責任であり、それが早稲田大学教旨の最も根本をなすところだというわけであります。

現実は、「利他行」とか、「世界平和」とか、「東西文明の調和」と言うだけでは、さまざまな紛争や戦争はなくなりません。しかしながら、「世界平和」や「東西文明の調和」を理想として、それを念じて、その実現に向けてコツコツコツと一歩一歩、歩んでいくんですね。大隈さんも、「この理想を実現するためには、吾人は終身努力しなければならぬ」、「吾人の理想とは如何、東西の文明其物を調和し、遂に世界の平和を来すと云ふのが吾人最後最大の理想である」と言っています。

以上が、大隈さんが追い求めていた理想であります。これで本日話そうと思っていたことは大体話し終えましたが、もうちょっと時間がありますので、少々付け加えておきましょう。

今日私が話したことを聞いても、あるいは大隈さんの文章を読んでも、家に帰れば、「今日の話はまあまあだったな」と思うだけで、直ちに利他行とか世界平和とかの行動に結びつくことはないかもしれません。大隈さんのいうような行動ができるようになるには、もう一つ、実は、心の奥底に慈悲心を持たないといけないのです。大隈さんは、「慈悲心を起こして善をなせ」ということを始終言っておりました。大隈さんが生れた佐賀藩には山本常朝が語り残した『葉隠』という書物があって、その中に四誓願というのが書かれています。

（一）武士道に於ておくれ取り申すまじき事

（一）主君の御用に立つべき事
（一）親に孝行仕るべき事
（一）大慈悲を起し人の為になるべき事

これを毎日唱えていると少しずつ前進するということが書かれています。『葉隠』ではこの中の四番目を特に重視し、「慈悲より出る勇気が本の物なり」とも言っています。

大隈さんは、大正六年（一九一七）五月、菩提寺の龍泰禅寺で講演をした際に次のように語りました。

慈悲は家族制度の根本である許りでなく、又実に勇気の源である。吾々が三百年来養われ来った葉隠の根本精神にも亦此慈悲を重んずる事があり、所謂四誓願が葉隠の根本を為している。吾輩微力短才にして今日の地位に在るは実に龍造寺鍋島の遺沢、殊に名君閑叟公撫育の賜である。

大隈さんのモットーである「人のために善をなせ」は、この『葉隠』の「大慈悲を起し人の為になるべき事」に由来するのです。

心の奥底にこの慈悲心がないと、人を哀れむという気持ちがないと、なかなか利他行なんてできるものではありません。例えば道端を歩いていて、小さい子供が井戸に落っこちようとしている。「あ、危ない」と走っていって抱きかかえる、そういう気持ちがないと、あるいは、そういう行動が取れる人じゃないと、なかなか利他行というのはできるものではない。あるいは、「自分は貧乏だから、人に対して何にもしてやることはできない」というときには、そばに行って涙を流してやる、一緒に泣いてやる、そういう気持ちを持たないといけないのです。

大隈さんは、東西文明の調和というものを体系化して、書物を出そうと考え、早稲田大学の教員たちを集めて、勉強会を開きました。「ヨーロッパ、東洋、あるいは日本と中国、いろいろ違ったところがあるけども、必ず共通する

ところがある」ということで、例えば、儒教の「仁」と、キリスト教の「愛」とを比較し

仁と愛とはその根本精神に於て互に甚しく類似したものであった。この二つの思想は共に人類の自然な社交性を地盤としてその上に発達したに外ならなかった。（中略）我が心を推して之を他人に及ぼさんとし、又は他人の悲喜を我が悲喜とせんとする同情的精神に至っては、両者全く揆を一にしている。

と述べています。

大隈さんは総理大臣を二度経験した実力もありますから、各方面にいろいろな影響を及ぼしました。ここではひとつ、イギリスの例を挙げておきましょう。

イギリス労働党が政権をとる前、明治四十四（一九一一）年、労働党を結成したシドニー・ウェッブが日本にやってまいりました。そして一〇月五日には、早稲田大学にもきて、早稲田の学生たちに「国民生活の最低限度」と題して講演をしております。大隈さんは立憲改進党という野党を結成し、明治三十一年には総理大臣となったわけでありますから、同じ野党である労働党のシドニー・ウェッブは、大隈さんの働き、ものの考え方に非常に関心を持っていました。

このシドニー・ウェッブは、一九一八（大正七）年の労働党大会に際して、『労働党と新しい社会秩序』Labour and the New Social Order-A Draft Report on Reconstructionというタイトルの綱領を書きましたが、この綱領は、イギリス労働党の最初の綱領として、今も価値を持っているものであります。そのイギリス労働党の綱領の最初は「一つの文明の終焉」という章ですが、実はその中に大隈さんがCount Okumaとして登場するのですね。

大隈伯は、日本の最も老齢で、最も経験があり、最も有能な政治家の一人であるが、彼は今回の戦争（第一次世界大戦）を地球の裏側から観察して、これはヨーロッパ文明の死以外の何物でもないと断言している。恰もかつ

てバビロン、エジプト、ギリシア、カルタゴそしてローマ帝国の文明が相次いで亡びたように、冷静な観察者（大隈さんのことであります）の判断では、全ヨーロッパ文明は今、致命的な強打を浴びているのである。

更に「もし、我々英国人が、日本人政治家（つまり大隈さん）が予想している文明の崩壊から逃れようとするならば、我々は、これから造り上げられようとしているものが新しい社会秩序であるということを確かめなければならない」云々という文章があり、以下、具体的な政策がいくつか列挙されています。たとえば最低限の生活保障をするとか、産業の民主的統制をするとか、国家財政の変革をするとか、余剰の富を公共福祉のために使うとかです。こういった綱領をつくって、労働党は、ようやく政権の座につくことができました。

大隈さんの影響力は、イギリスにも及んでいたのです。私は一介の大学教員でありますから、せいぜい教室で犬の遠吠えのように、学生たちに説教するくらいが関の山ですが、本日お集まりの方々、国会議員を始めさまざまな職種の方がおられますから、まずは各自の身近から、世界平和を念じていろいろ活動していただければ、大隈さんも喜ぶのではないかと思っております。

そろそろ私に与えられた時間もなくなりました。本日はこれで話を終わらせていただきます。ご清聴、どうもありがとうございました。